

『New』 town

—人工の土地がつくり出す新しい街並みと居住—

1160115 長島 秀太

指導教員 渡辺 菊眞

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. 背景と目的

高度経済成長以後の大規模な住宅供給に伴い、日本全国で新興住宅地の造成が行われた。もともと田畑だった場所や山があった場所は人の手によって、自然を失いながら住宅地へ変化していった。その人工の土地の上に合理的に住宅は建設されてきた。造成地は住宅用地を新設するという目的にストレートに答えた非常に合理的な土木構造物である。そして、その上に広がる新興住宅街もまた、規格化住宅が規則的に並ぶ、合理的かつ画一的な街並みとなっている。住むうえで快適な環境は確保されている新興住宅街ではあるが、改善することでより良い住環境、風景をつくりあげることができると考えられる。

新興住宅街の改善点は2つ挙げられる。1つ目は、「街並み」である。造成地は合理的な区画で区切られた土地であり、そこに建ち並ぶ規格化された住宅群は、どこにでもありそうな面白みのない街並みをつくり出している。造成地はもともと居住には不向きな場所を人の手によって、人工の土地に作り替えることで生まれた。それは平地の住宅地と比較すると明らかに異質であり、その異質性こそが造成地にとっての大きな特徴である。これは他の土地にない要素であると考えられる。住宅を建設するにあたって、造成地にあって他にない唯一無二の土地柄を反映させることで、「新興住宅街」の特色が現れ、合理化による面白みに欠けた街並みをより良い街並みに変えることができる可能性がある。



図1 新興住宅地と通常住宅地

2つ目は、「庭の不活用」である。現在の規格化された住宅では、敷地の余白部分（建物の建っていない部分）に申し訳程度の植栽を植えているだけの庭が多い。庭というものは鑑賞することで生活の中に豊かさや、ゆとりを与えることが大きな役割である。現在の住宅と庭のあり方では、庭の持つ魅力、効力を最大限生かすのは難しい。住宅と庭のあり方を今以上に緊密にすることで、より良い生活を創出する可能性がある。



図2 外観を取り繕うだけの庭

以上の2点を改善することで、新興住宅街という古くからの土地柄の無い場所に、新興住宅街特有の街並みと、庭を有効に生活に取り込んだ緑あふれる暮らしを実現することができる。それを実現する新興住宅街の為の住宅の提案を本設計の目的とする。

2. 設計敷地

今回の設計にあたって選定した敷地は高知県高知市潮見台にある潮見台ニュータウンである。山の北側の斜面地に位置し、敷地全体はコンクリートの擁壁で構成され、周囲には巨大な調整池があり、人工物の印象がとても強い印象を与えている。ひな壇上に造成地が展開しているため、敷地北側からの風景はとても印象的である。



図 3*1 対象敷地位置図 図 4 敷地北側からの遠景

3. 設計

3-1 基本方針

今回の設計では、「造成地の特徴を反映させた街並み」「庭を有効活用した豊かな生活のある住宅」、この2つを主目的として設計を行う。

3-2 造成地の特徴の考察

造成地は住宅の無い状態では（純粹に土地だけがある状態）、コンクリートの土木構造物が規則的に建ち並ぶ風景が広がり、住宅地のふもとにある調整池と相まって強い人工物の印象を与える。このような圧倒的な人工物が生み出す非日常の風景がある場所。それが、造成地の土地柄なのではないかと思う。



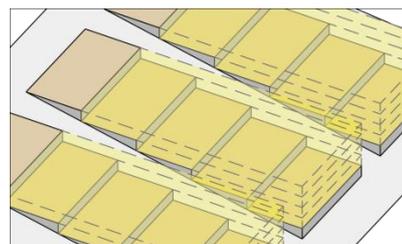
図 5 調整池 図 6 擁壁の建ち並ぶ風景

そのため、「圧倒的な人工物を感じさせる非日常の街並み」を目標とすることで、土地形状を生かし

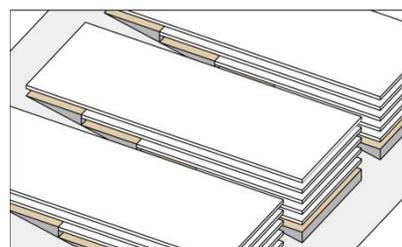
つつ、造成地に独特な風景を生み出せるのではないかと考え、住宅の基本骨格を考えた。

3-3 住宅の基本骨格

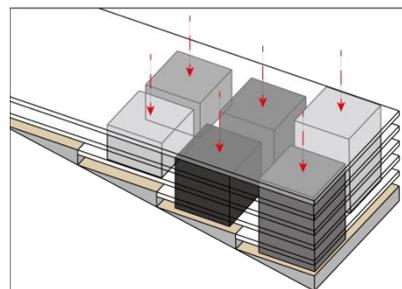
「圧倒的な人工物」という印象を与える要素として、「幾何学」「画一的」「巨大さ」があると考えられる。この要素をコンクリートの擁壁は持ち合わせており、設計の基本骨格を考えるうえで、擁壁を核として考えた。現状の宅地はひな壇上に擁壁があり、その上に住宅が並んでいる。その擁壁上面の延長線上にスラブを張り出し、積層させていくことで、巨大かつスラブの画一的な見目の構造物をつくり出す。この構造物が生み出す空間の中に住居を設計する。複数あった家形は幾何学のファサードで統一されるため、家形が数並ぶ風景と比べ、より人工物の印象を強く感じさせる。



人工的な印象を与える風景



更に人工的な印象を与える風景



居住空間を創出する

図 7 外骨格形成のダイアグラム

3-4 造成地での住宅の展開

造成地には大まかに分けて3つの土地がある。1つめは、上記で説明したような擁壁がひな壇上に連なる土地。2つ目は4mほどの高さのある擁壁のうえにある土地。3つ目は擁壁がほとんどない、ほぼ平地の土地。1つ目のひな壇上の土地では集合住宅ユニットを設計し2つ目の高い擁壁の土地では2戸1セットの戸建て住宅ユニットを設計した。擁壁のない土地ではスラブの構造物は展開することができないため、住宅の設計は行わず、コントラストを生む空間とした

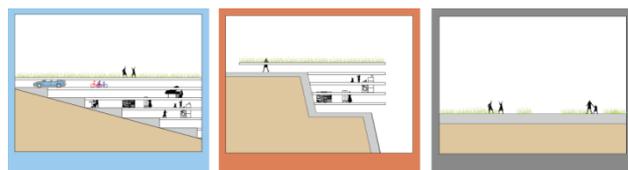


図8 設計の分類図

3-5 スラブ上面の人工緑地

スラブによって住宅をつくることで、積層されたスラブの最上面には人工の地上面が出現する。この地上面に緑化を行うことで、住居の上部に住民のための公園のような空間を創出する。各住居にアクセスするための外部廊下を緑化スラブより一段下にするすることで、この建築全体の人工物らしさをより強め、ところどころ中庭の穴があることで

非日常的で奇妙な空間が生まれる。

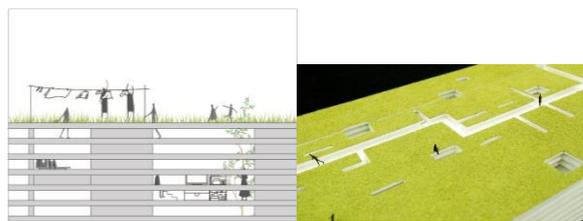


図9 人工緑地と住居 図10 人工緑地と外部廊下

3-5 埋設されたエントランス

建物上部の外部共用廊下を通り各住居へアクセスする。人工の地上面上には家の存在はなく、階段を使ってエントランスに向かう。巨大な人工物、人工の緑地が合わさり、他にない不可思議な風景をつくり出す要素となっている。



図11 エントランスに至る階段

3-6 庭と住宅のあり方

現在の住宅と庭の関係性は希薄であり、庭は外観を取り繕うだけの存在となっている。そのため、内部の居住空間と庭を結びつけるために、中庭を配置した。住宅に中庭を配置することで、植物が核のような存在として居住空間の中に存在し、生活の中にゆとりを与えることで、庭の持つ魅力、効能を最大限に活用できるようにした。

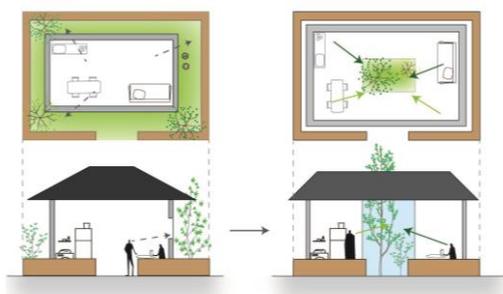


図12 住居と庭のあり方のダイアグラム

3-7 中庭

中庭によって住居に光を与え、そこにある植物によって、生活に豊かさを与える。中庭は連続するスラブを貫き形成する。中庭を水平投影したままに開けると、夏季の日射を住居内に取り込んでしまうため、中庭は日射遮蔽ができるように角度をつけた穴をあけて配置した。

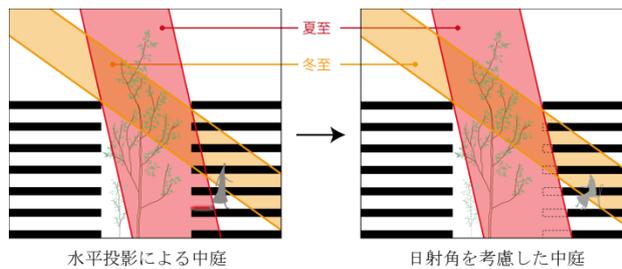


図 13 中庭における日射遮蔽のダイアグラム

中庭は住居に取り囲まれているため、空気が籠り、湿度が高く環境として劣悪な状態になってしまうため、庭に面して開口を多く設けると共に、スラブの間を通して通風が行えるように間隙を設けた。

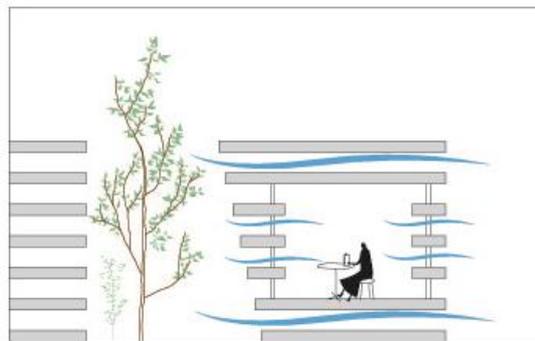


図 14 中庭通風のダイアグラム

4.まとめ

擁壁が生み出す強い人工物としての造成地を原空間として設定し、それを活かす住宅のあり方を提示した。具体的には積層するスラブによってできた住宅が形成され、通常の住宅街では起こりえない独自性に満ちた街並みを形成することが出来た。また、住居に中庭を介在させ、現代の暮らしでは希薄になっていた生活と植物の距離を縮めることで、より精神的に快適な生活を創造することが出来た。以上の2点から大規模造成地の埋もれていた良さを活かした新しい街並み、中庭を核にした新しい住環境の『New』townをつくりあげることが出来たのではないだろうか。

参考文献

*1 Google マップ
 <<https://www.google.co.jp/maps/@33.5589405,133.6202277,1704m/data=!3m1!1e3>>
 (取得日 2016.2.8)



図 15 集合住宅内模型写真

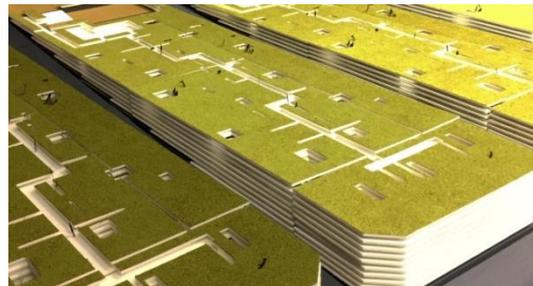


図 16 集合住宅俯瞰

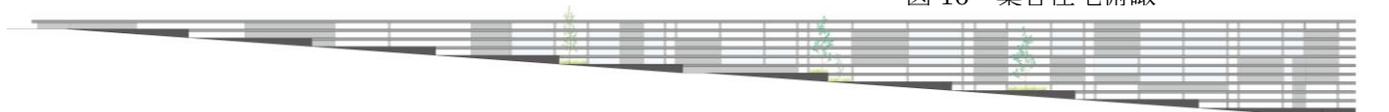


図 17 集合住宅長辺方向立面図

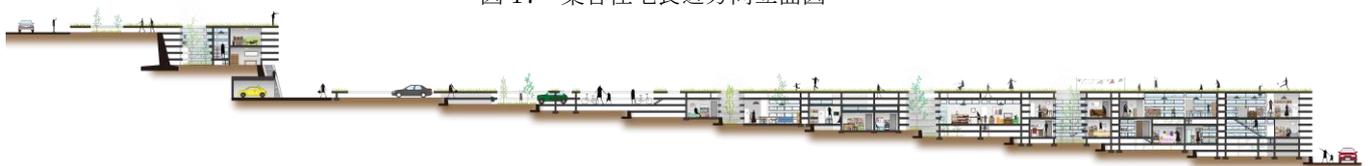


図 18 全体断面図